

て今日に至っているが、帰還後の生活もまた「有為転変」であった。

舞鶴に上陸し故郷に帰った時点でシベリアでの労苦の終結としたかったが、その後の祖国での生活の厳しさは、戦後のことだから皆苦しさは同じだという意味で忘れ去られた。過去の世界史に前例のない、戦後のソ連強制抑留についての国民的理解が必要であると思う。

「観艦式」

ソ連邦の娘さんよ、ありがとう

和歌山県 岡本 広 蔵

大正十一年七月三日、岡本源之助、松枝の三男として、現海南市船尾一五一番地にて出生。昭和四年黒江小学校に入学、同十年尋常科を卒業、家庭の漆器木工業に従事すると同時に夜間の学校に通学しました。漆器界不振により、有田郡八幡村で林業に昭和十五年よ

り従事。十八年、大阪府信田山、大日本工機株に入社。家族は、妻秀子、長男幹夫と三人家族でしたが、昭和十六年、次男の洋司は白血病で他界しました。

昭和十七年に徴兵検査、第二乙種。前職に勤務中、昭和十九年八月召集され、和歌山二十四部隊に入隊。三カ月の訓練後十九年十二月、堺市金岡部隊に転属。各地からの応召者二十三歳から四十歳くらいの寄せ集め部隊に感ぜられました。ある夜、大阪駅より出て、朝、下関より釜山へ。そして北朝鮮平壤着、平壤第一〇九飛行大隊に配属されました。

ここでの生活は飛行場勤務ですが、私は歩兵科でした。新兵の私には意外と思うほど、私が接した上官は皆親切な方々ばかりで、入隊以来一度も軍隊でビンタを受けたことはありませんでした。特に楽しかったのは将校の集会所でした。国民に対しては誠に申し訳ないことであると私は思っていました。この部隊では八十人の少尉殿がいて、毎晩大宴会の連続で、私もみんなに勧められて大酒飲みにさせられていました。

その後、ある農村へ行かされましたが、そこは、あ

こちらこちらと山の中に弾薬や火薬等を保管していました。それを毎日二時間交代で一人、冬の山をぐるっと一周すると約一時間ですが、夜などは特に淋しく、隊員の構成、装備など何もなくて、警備についても全く心細いものでした。

昭和二十年六月、朝鮮大田飛行場で飛行機をリング畑にリングで偽装して隠すのですが、それが毎日繰り返され、リングを食べて腹いっぱいになりましたが、御飯が食べられず、ばかげたことです。

「終戦の詔勅」は聞かないままでした。何だか世間が騒がしい感じがして何事かなと思いましたが、あまりそのときは気にもとめずにいきました。そのうちに、あちらこちらで「アカトンボ」と呼ばれていた練習機が燃やされ始めました。皆、それを呆然と眺めていました。それからすぐに平壤へ帰隊命令があり、武装解除となり、将校と兵と別行動となって、三日後、私たちは日本海側の港町に移動させられ、四カ月その地で収容されました。日本の敗戦により、たちまち朝鮮人のすさまじい暴動が起きているという噂を何となしに

聞いたものです。

昭和二十年十二月下旬、誰かが「日本に帰れるぞ」と叫びました。「ほんとか」一斉に喜んで「万歳」と叫んで皆の顔は生き生きとしていました。いよいよ乗船ということになって何だか変な気がしましたが、そのときは日本に帰れることばかりで外のことなど考えませんでした。船底に送り込まれて、これは違うと直感しました。そのときはもう「なるようになれ」の気持ちになっていました。三日、四日と過ぎたでしょうか、着いたところは、後から知ったことでしたがナホトカでした。

ソ連領シベリアの凍土を初めて踏んだ第一目のことです。腹がすいているので飯を炊くことになったのですが、水がなく、仕方ないので海水でどうだろうということになって試し炊きしてみました。失敗で、苦くて食べられそうにもありませんでした。

いよいよ、行く先もわからないまま行軍の開始でした。十日間歩かされ、幾度か落伍しそうになりましたが、無事に抑留地らしいところにたどり着きました。

ナホトカを出発したときの人員の半数くらいになっていたことに不審を覚えました。いなくなった人たちのことを考えるだけの余力もありませんでした。

収容所で一夜を明かし、各班に編成されましたが、私は第一班でした。いよいよ収容所生活の始まりです。何か不安な気持ちもありましたが、皆と一緒にいるのだからと自分に言い聞かせました。一週間後、労役を始め、土木作業、伐採、道路工事等々、午前九時出発、午後四時まで、自動小銃を構えた警備兵がいても皆のんびりで、ノルマなんか気にしないようでしたが、黒パンの配給に大差がつくととなると、皆、目の色が変わってくるようになったものです。枕型黒パン一本を十二人でととなると、二口か三口で食べ終わるので耐えられません。常に空腹状態ですから、ノルマ向上に夢中にならざるを得ないように仕向けられたものです。

伐採は非常に危険で、直径六十センチ以上の松の木を切り倒すのですから常に注意が必要で、あるとき、おとなしい兵長がちょっとした瞬時の不注意で尊い命を落としたことがあります。

軍隊としての組織は既になくなっていましたが、私の中隊は所内で月一回、身体検査がありました。特にシラミについては口やかましいソ連の検査官、二十二歳か二十三歳ぐらいの美人の少尉でした。ほかにも看護婦らしい二人の前に立って一人ずつ検査を受けるのですが、もちろん私たちはオールヌード。彼女たちは、私達の性器、陰毛をかき分けシラミの有無を調べるのです。変なもので、そのときは相手が若い女性でしたが、何とも思いませんでした。そのことは今でも覚えていません。

身体検査による体格と労働の類別は彼女たちが決めるのですが、内臓の状態に関係なく、丈夫そうな者は甲「伐採」、細い身体の者は乙「道路工事」。私は山へ行ったり、道を掘ったりの毎日でした。このころの体験で忘れられないことの一つに、真っ白で綺麗だと思っていた雪を飯盒に詰めて水にして炊事に使いたいと思いましたが、溶かしてみても驚いたことは、それは無数のゴミとカビと細菌でいっぱいだったことです。それから二度とやらないと心に決めたものです。恐ろし

いことでした。

酷寒越冬のためにソ連製防寒服の支給を受けましたが、私たちの抑留地スーチャンは極東でも最南端に近い地点にあり、気温は零下十度か十五度ぐらいに下がるといいますが、あまり寒いと私は思いませんでした。

次に食事についてですが、収容所に着いた当初はジャガイモ一個、それも生いも支給。黒パン一斤（六百グラム）を十二人で分配するのですから一人五十グラムしかないのです。足りるはずがありません。しばらくは黒パンだけでした。そのころはまだ朝鮮出發時に持ってきた米、砂糖、大豆、乾パン等で補って、もちろん十分とは言えませんでした。そのうち黒パン三分の一、高粱、トマト、ニンジン等の混合粥のようなスープが配給されました。これでほんの少しですが、腹は満たされた感じでした。

収容所の設備のことですが、体裁よく言えば「二段ベッド」ですが、お粗末そのもの。重労働の伐採や道路工事から帰ってくるとぐったりとなって、上段に上るのに足が上がりず、人に押ししてもらわないと上れま

せんでした。

ある朝、私は軽い脳卒中で倒れました。幸い二日で気がつきましたが、その間、同郷海南出身の二人の戦友、ナホトカからの道中で知り合って互いに励まし合っていた方たちが、私を一生懸命世話して面倒を見ていてくれたことに、今でも感謝の気持ちを持ち続けております。

次に、これはちょっと伝えてよいのか悪いのか、昭和二十一年六月のある日、私たち十人が、民間人男女十人と芋掘り作業に派遣されました。広々とした芋畑で久し振りに解放されたような気分でした。この地方の農家の人と芋掘りに励んだ八時間ほどですが、大きな芋がころころと出てくるので思わず声があちこちで聞こえました。その声は私たちのものでした。農家の人々とも打ち解けて、バケツで煮て振る舞ってくれた芋の味は忘れられません。休憩のひと時のこと、一人の娘さんが木の根っこに足を開いて腰を掛けておりました。私たちは寝転がっていましたが、仲間の一人が思わず「観艦式だ」と叫びました。皆、一斉に娘さん

の方を見ました。明らかに娘さんは下着を着けていない
くて中が丸見えだったのです。食足りずして私たちは
性欲など忘れ去っていたのですが、「娘さんよ、あり
がとう」と、そのとき見た者、皆、そう思ったこと
でしょう。私も今も思い出すのですから。

昭和二十二年二月、私は栄養失調で入院させられま
した。なかなか立派に見える病院でしたが、軍医中尉
と三人ほどの衛生兵で、私も手伝いをさせられました。
昭和二十二年六月初めに帰還命令を受け、六月六日
ころナホトカへ。六月十日舞鶴へ上陸し、十一日故郷
海南駅に着きました。自宅までぶらぶら歩いて帰りま
した。街は静かでした。家には母一人、「突然の復員」
に驚き、大いに喜んでくれましたが、父は二十一年、
他界していました。

私は六カ月静養後、川崎造船に就職。昭和二十四年
同所閉鎖で退職し、木工自家営業。昭和二十六年結婚。
昭和三十年、井本木工所と合併。同所勤務四十年間。
私の戦後五十余年は順調。余生は楽しく生きたいと
思っています。

赤松との格闘

島根県 田辺勝義

入ソ

黒龍江を渡って初めてソ連の地を踏んだのは二十年
九月十一日だったと記憶している。私達がチタ地区の
ジップヘーゲンという土地に連行されたのは忘れもし
ない十月二日で、シベリアはすでに冬で毎日吹雪が舞っ
ていた。慣れないあの寒さは身にこたえた。ここが私
達のいつまで続くかわからない生活の地となるらしい
のだ。ところが、入る家もない。持参の日本の天幕を
建てて当分はそこに落ち着き、その後、私達で伐採し
た木材で収容所を建築して本式なラーゲル生活になっ
た。住む所から私達の自給自足によるもので、いかに
日本人の強制連行が場当たりの急な施策であったか
をうかがい知ることができるのである。

伐採作業